を対象としてきたが，最近ではコンテンツという用語がしばしば用いられるように，次第に情報の内容の扱いに目を向けるようになってきた。音声コーパスの構築は，その一つの現れと見ることもできる。

なお、上述のことは自動翻訳に代表される自然言語処理研究と言語（テキスト）コーパスや画像処理分野の研究と画像データ等についても同様に考えることができる。

４．　音声・言語データの活用

日本では(社)日本電子工業振興協会（現在，電子情報技術産業協会），ATR音声言語通信研究所，(社)日本音響学会，文部（科学）省重点領域研究やCOEプロジェクト等によって，各種の音声・テキストコーパスあるいは電子化辞書等が構築されてきた。このように個別のデータや知識の電子化はある程度進んでいるといえる。これをさらに発展させて，大規模知識資源の構築と体系化さらにはその活用基盤を整備しようというプロジェクトが日本でも始められている。

音声・テキストコーパス等の知的資源の収集・構築・保管・配布を行う機関として，アメリカでは90年代の初めに言語データコンソーシアムが，欧州ではヨーロッパ言語資源協会が90年代半ばに設立され，音声・自然言語処理研究に多大な貢献をしてきた。21世紀に入ってからは，韓国や中国にも同様の組織ができている。一方，日本では音声コーパスの整備は比較的早く始められたが，上記のような組織の整備は遅れて，99年に予算の裏づけのないまま言語資源協会が設立され，2003年にNPOとして再発足してこれから活動を開始しようとしているところである。

このような動きは図書館とは少し違った方向を向いているように見えるが，知的基盤の整備という点では同じ方向を目指している。音声・テキストに限らず、画像・映像を含めた知的情報資源の整備とその活用基盤の構築がこれからますます重要になってくるものと思われる。図書館がそのようなものとどのようにかかわっていくのか，考えていく必要があるのではないだろうか。

（いたばし・しゅういち　電子・情報工学系教授）

開学30周年特別企画「本学図書館所蔵の貴重書」③

殿村本『水滸後伝』：識語が伝える本書の来歴

大塚　秀明

洋の東西を問わず名作は続書を生む。『水滸伝』にも数種の続書があるが，続書の常として作品の評価はあまり高くない。しかし『水滸後伝』だけは例外である。むろん『水滸伝』を越えることはないが，『水滸伝』で生き残った三十二人が遺児や二世や曾ての敵将と一緒に船で外国に渡る物語は出色である。とくにわが国では馬琴の『椿説弓張月』の素本として知られ，数ある中国の続書のうちで邦訳が 2 種類もあるのは『水滸後伝』だけである。そして本学の蔵本は，その馬琴と関係があるようだ。

『水滸後伝』（八巻四十回）は清初に書かれた長編小説。古宋遺民著とあり，序には明の萬暦の年号があるが仮託であり，明の滅亡(1644)後，遺民として生きた陳忱の作とされている。原刊本といわれる英国博物院蔵本には「遺経堂蔵書」という書舗とともに清の康熙三(1664)年の刊年が記されている。原刊本はのちに「紹裕堂新刻」として重刻され，近年「古本小説集成」に華東師範大学蔵本の影印本が収められている。さらに後年には人物図像八葉を入れた有図紹裕堂刊本もある。この原刊本に対して蔡元放が改修を加えた乾隆三十五(1770)年の序を持つ刊本があり，所蔵も多数報告されている。今日広く流布しているのは改修本を排印したもので，亜東図書館本(1924)や上海古籍出版社本(1981)などがある。上述の邦訳 2 種とは森槐南が改修本を訳し，鳥居久靖が原刊本を訳した邦訳をいう。

写真１　二十六回二葉裏に見られる「遺経號」の三文字逆さに押されている

●遺経號の朱印

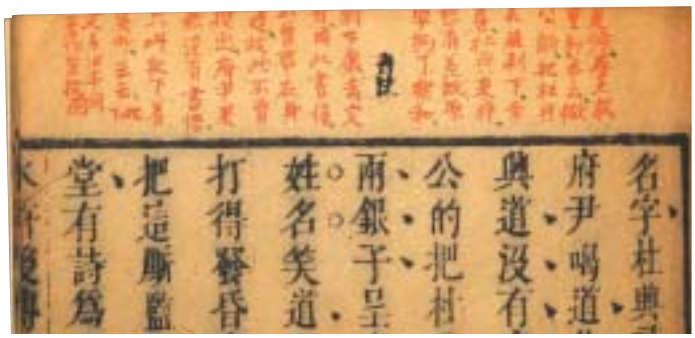
本学の『水滸後伝』は数少ない原刊本系の版で国内では本学の他に早稲田大学と東京大学の所蔵が報告されている。本学本は早稲田大学本と同系で，華東師範大学蔵本の影印本と比較すると相違点が多く，消去法で考えると本学本は遺経堂の版とも思われる。その根拠として，一つは注釈が付される場所が違うこと。本学本では“眉批”と呼ばれる欄外に注釈が施されているのに対し，華東本では欄外のほか“傍注”と呼ばれる文の傍らにあること（さらに言えば，華東本は複数の版木に依るものか，頁が換わる行に字句の重複があり誤刻が多く俗字が多数見られる）。いま一つは上図に示すように本学本には「遺経號」という印が三箇所（なぜか逆さに）押されていること。こうした印は華東本には見られない。所蔵印なら通例巻首に押し，見落としてしまいそうな場所には押さないであろう。三つ目は巻末に華東本にある「紹裕堂新刻水滸後傳八巻終」の字句が本学本にないこと。単なる書き落としかもしれないが本学本の巻末に小石元瑞が記した識語に「松坂殿邨篠斎翁新購獲之，余借覧其書多磨滅欠缺，翁因託余校補，聞山脇東海先生蔵一善本即乞借讐對」とあり，その校訂ぶりからみて書き落としとは考えにくい。ただし華東本との距離があることは判っても本学本を遺経堂本と即断するには慎重にならざるを得ない。なにより小石元瑞が拠り所にした山脇翁本の所在が不明であるからだ。

●馬琴の書き入れ

識語の他に下図に示すように本学本には「著作堂校閲」（あるいは「著作堂云」）の注釈が見られる。一回二箇所，四回，八回，三十三回二箇所，三十六回の七箇所ある。著作堂とは馬琴の別号，法名にも遣われている。いずれも蔡元放重訂本に言及している。先学に研究によると馬琴は享和二（1802）年に旅先で改修本を閲覧し，その時の手控えで『弓張月』を構想，後年文政十三（1830）年に改修本を入手したが，粗悪本なので友人殿村篠斎が先年文政九（1826）年に入手し小石元瑞に校訂を依頼した『水滸後伝』を借用し，異同を朱で記し翌年返却したという。馬琴の本は現在天理図書館に蔵されている。本学本は馬琴が底本とした殿村本と考えられるので，書き込まれた「著作堂」の字句が馬琴の手である可能性が大いにある。またその筆跡を現在伝わる馬琴の書簡のそれと比較すると同一のものと考えられる。

本学本『水滸後伝』は，中国文学の研究資料として，多くの補修が施されてはいるものの原刊本に近い姿を留めていること，日本文学の研究資料として，今後の調査を残してはいるものの馬琴が手にしたであろう殿村篠斎本と考えられること，貴重図書に相応しいものと思われる。

写真２　四回五葉表に見られる著作堂校閲の書き入れ



原刊本では，杜興は，孫立に託された手紙を携えて楽和を訪ねるが手紙が見つかり役人に捕らえられてしまう。改修本では，見つかることを恐れ手紙は携帯していなかったと設定が換えられている。「重訂本」と「旧本」という語を用いていることから，著作堂は原刊本を旧本と考えていたことが判る。

（おおつか・ひであき　現代語・現代文化学系助教授）